

保存用 10

# 寺 部 遺 跡

御津郡御津町教育委員会

1990年2月

岡山県御津町教育委員会

## はじめに

このほど、県営圃場整備事業による埋蔵文化財発掘調査を昭和63年8月1日より9月21日まで約250㎡を御津町教育委員会が対応したのでここに報告書にまとめたものである。

御津町は、町勢振興計画による企業誘致等による開発が進められ、文化財保護保存の立場から英断を以て8月1日から担当者を採用いたし、これに対応した最初の発掘調査であります。

県文化課、古代吉備文化財センター及び地元地権者の方々に対し、文化財保護法の趣旨をご理解いただき、又調査に積極的にご協力賜り、心からお礼申し上げ挨拶といたします。

平成2年2月28日

御津町教育委員会  
教育長 宮本久雄

## 例　　言

1. 本書は、御津町五城北地区県宮園場整備事業に伴い発掘調査を実施した「寺部遺跡」の調査成果報告書である。
2. 遺跡は岡山県御津郡御津町大字新庄1503番地ほかに所在する。
3. 現地での調査は1988年8月1日から9月21日まで実施した。その後、遺物整理、本書の作成を行なった。
4. 調査は、岡山県岡山地方振興局の委託を受けて、御津町教育委員会が実施した。
5. 調査は下記の体制で実施した。

御津町教育委員会 教育長 宮本 久雄（1989年3月まで教育次長兼務）

教育次長 五藤 始（1989年4月より）

主幹 賴定 節夫（1989年3月まで）

同 海野 仁志（1989年4月より）

社会教育主査 宇野 尚憲

書記 長谷川一英（調査担当）

6. 調査にあたっては、岡山県教育委員会文化課、岡山地方振興局農林事業部耕地第2課、岡山県農地開発公社、御津町役場農業土木課、地元寺部地区の方々、御津町文化財保護委員会等からご指導、ご援助を賜った。記して感謝の意を表わしたい。

また、別記の作業員の方々の協力も得た。

7. 出土遺物、実測図、写真等は御津町教育委員会にて保管している。

8. 本書の執筆は、第Ⅱ章第1節を宇野が、他を長谷川が担当した。

9. 本書の編集は長谷川があたった。

題字は宮本久雄教育長による。

## 凡 例

1. 遺構実測図等のレベルは、すべて T.P.（東京湾平均海水潮位）を用いた。  
方位は図 1～3 が真北、他が磁北である。
2. 遺物実測図の断面が白色のものは弥生土器、土師器を、黒色のものは須恵器、陶磁器を示している。
3. 実測図等の遺跡名は寺部（T e R a B e）88とした。また、遺物には遺物の取り上げ単位ごとに01から登録番号を付与した。遺物の詳細は別途作成した台帳に記録し、遺物への注記は『TRB88-登録番号』のみとした。
4. 遺物の取り上げ、本書の記述には以下の略号を使用した。

S B . . . 据立柱建物

S D . . . 溝

S K . . . 土壙

S P . . . 柱穴、ピット

また、本書の記述に際しては、煩雑さを避けるため、調査時に付与した遺構番号をそのまま使用した。

## 調 査 參 加 者

卯善常雄・宇野治郎・宇野延夫・宇野福子・古家悦子・白波瀬信良・田村美智子・友森富貴子  
・花房義質・松尾千鶴子・松田 正・安宗貞男・吉行久枝・横山甲子野

# 目 次

はじめに	御津町教育委員会 教育長 宮本 久雄
例 言	
凡 例	
本文 目 次	
図 目 次	
写 真 目 次	
I 地理的・歴史的環境	1
II 調査に至る経緯と経過	
1 調査に至る経緯	4
2 調査日誌	5
III 調査成果	
1 基本層序	7
2 第1遺構面	7
3 第2遺構面	12
4 第3遺構面	21
IV まとめ	27

# 図 目 次

図1 御津町位置図	図10 第2遺構面平面図
図2 調査地周辺遺跡分布図	図11 SK01出土遺物実測図
図3 調査地位置図	図12 SK04出土遺物実測図
図4 調査地土層断面実測図	図13 SB01平面図・断面図
図5 第1遺構面平面図	図14 SB02出土遺物実測図
図6 褐灰色砂質土・黄褐色砂質土層出土遺物実測図	図15 SB02平面図・断面図
図7 灰褐色砂質土層出土遺物実測図	図16 SP16出土遺物実測図
図8 暗茶褐色砂質土層出土遺物実測図	図17 SB03平面図・断面図
図9 暗灰色砂質土層出土遺物実測図	図18 暗茶色砂質土層出土遺物実測図
	図19 第3遺構面平面図

## 写 真 目 次

- |                      |                       |
|----------------------|-----------------------|
| 写真1 調査地遠景（南から）       | 写真11 第2遺構面 SB03（北西から） |
| 写真2 調査地近景（南西から）      | 写真12 作業風景             |
| 写真3 第1遺構面（北から）       | 写真13 第3遺構面（北から）       |
| 写真4 第1遺構面（南から）       | 写真14 第3遺構面（南から）       |
| 写真5 第1遺構面 足跡（南から）    | 写真15 第3遺構面 足跡？（南から）   |
| 写真6 第1遺構面 足跡（南から）    | 写真16 第3遺構面 足跡？（東から）   |
| 写真7 第2遺構面（北から）       | 写真17 出土遺物             |
| 写真8 第2遺構面（南から）       | 写真18 出土遺物             |
| 写真9 第2遺構面 SB01（北から）  | 写真19 調査地現状遠景（南から）     |
| 写真10 第2遺構面 SB02（西から） | 写真20 調査地現状近景（南から）     |



調査参加者

# I 地理的・歴史的環境

御津郡御津町は岡山県のほぼ中央に位置する。東は赤坂町・山陽町、西は加茂川町・岡山市、南は岡山市、北は建部町・吉井町に接している。1953年、1町6村の合併により誕生した面積114km<sup>2</sup>、人口11,000人の町である。寺部遺跡は旧赤磐郡五城村に位置する。

町内をほぼ北から南へ旭川が貫流し、金川で宇甘川・新庄川が合流している。

これらの河川によって形成された平地を標高200~400m級の山地が囲んでいる。北西部の山地は吉備高原南東端にあたり、400m級のものも見られるのが、他は、比較的風化が進み、低平な丘陵である。平地はほとんどが耕地として利用されているが、近年では、住宅地・工業用地としての利用も進んで来ている。

寺部遺跡は新庄川の中流域の東側に位置する。通称「天狗山」と瀬戸山の間に西に向って開く谷の北側斜面に立地している。標高65~80mである。新庄川流域の地質は大部分が花崗岩質である。深層風化が進んでいるため、山容はなだらかである。寺部遺跡の周辺も同様の地形を呈している。遺跡の現状は、谷部は水田に、山裾部は宅地になっている。



図1 御津町位置図

寺部遺跡の位置する新庄地区は、開発行為が及んでいなかつたためもあって、従来は、新庄尾上遺跡と十数基の古墳が知られていたのみであった。

近年の圃場整備事業に伴う事前調査によって、この地にも多数の遺跡が存在することが明らかになりつつある。

寺部遺跡周辺の縄文時代の遺跡としては、伊田の岩井山丘陵南麓において後期の土器片の採集が報告されているが、詳細は明らかでない。しかし、今回の調査地周辺で晩期の土器片を探取した。1988年に新たに発見された平岡西遺跡でも晩期と思わ

れる土器片が出土した。

弥生時代の遺跡としては、寺部遺跡の南に隣接して、前述の新庄尾上遺跡が存在する。最近になって、南に銀冶屋谷遺跡、南西に新庄原遺跡、北に平岡西遺跡・矢知遺跡とこの時期の遺跡の新発見が相次いでいる。

古墳時代の遺跡としては、寺部遺跡の背後の天狗山山麓に経畔古墳、熊野神社古墳が存在している。これらの内部主体は不明だが、円墳と考えられている。山頂には、全長4mの横穴式石室をもつ天狗古墳が存在している。この他にも、周辺の尾根上に十数基の古墳が存在している。なかでも、八つ塚古墳、天神鼻1号墳は、規模は小さいながらも、前半期の前方後円墳として注目されよう。また、弥生時代の各遺跡も、この時期にも続いて営まれていたようである。

これらの遺跡からは古代から中世の遺物も出土している。中世においては、この地域は交通の要所であったことから『五城』と言われるように、松撫城・西谷城・矢知城・地頭城等多くの山城が築かれたことが記録されている。

- |                                   |                          |
|-----------------------------------|--------------------------|
| 1 火の釜古墳                           | 20 新庄尾上遺跡（1988～90年調査）    |
| 2 佐野古墳                            | 21 西谷城                   |
| 3 平岡西城                            | 22 新庄原遺跡（1987年発見）        |
| 4 年次遺跡（1989年発見）                   | 23 銀冶屋谷遺跡（1988年発見・89年調査） |
| 5 一本松1号墳                          | 24 天神鼻1号墳                |
| 6 一本松2号墳                          | 25 天神鼻2号墳                |
| 7 一本松3号墳                          | 26 天神鼻3号墳                |
| 8 一本松4号墳                          | 27 天神鼻4号墳                |
| 9 赤鉢遺跡（1989年発見）                   | 28 八つ塚古墳                 |
| 10 須道山古墳                          | 29 八つ塚2号墳（消滅）            |
| 11 八幡神社古墳                         | 30 八つ塚3号墳（消滅）            |
| 12 銀冶久古墳                          | 31 古墳？（1987年発見）          |
| 13 平岡西遺跡（1988年発見・調査）              | 32 松撫城                   |
| 14 矢知遺跡（1989年発見・岡山県古代吉備文化財センター調査） | 33 岩井山古墳群（1975年調査、一部消滅）  |
| 15 矢知城                            | 34 岩井山遺跡                 |
| 16 天狗古墳                           | 35 伊田冲遺跡（1986年発見・調査）     |
| 17 寺部遺跡（1988年発見・調査）               | 36 上伊田（伊田大谷）遺跡           |
| 18 熊野神社古墳                         | 37 宅美池遺跡                 |
| 19 経畔古墳                           | 38 塚の谷遺跡                 |

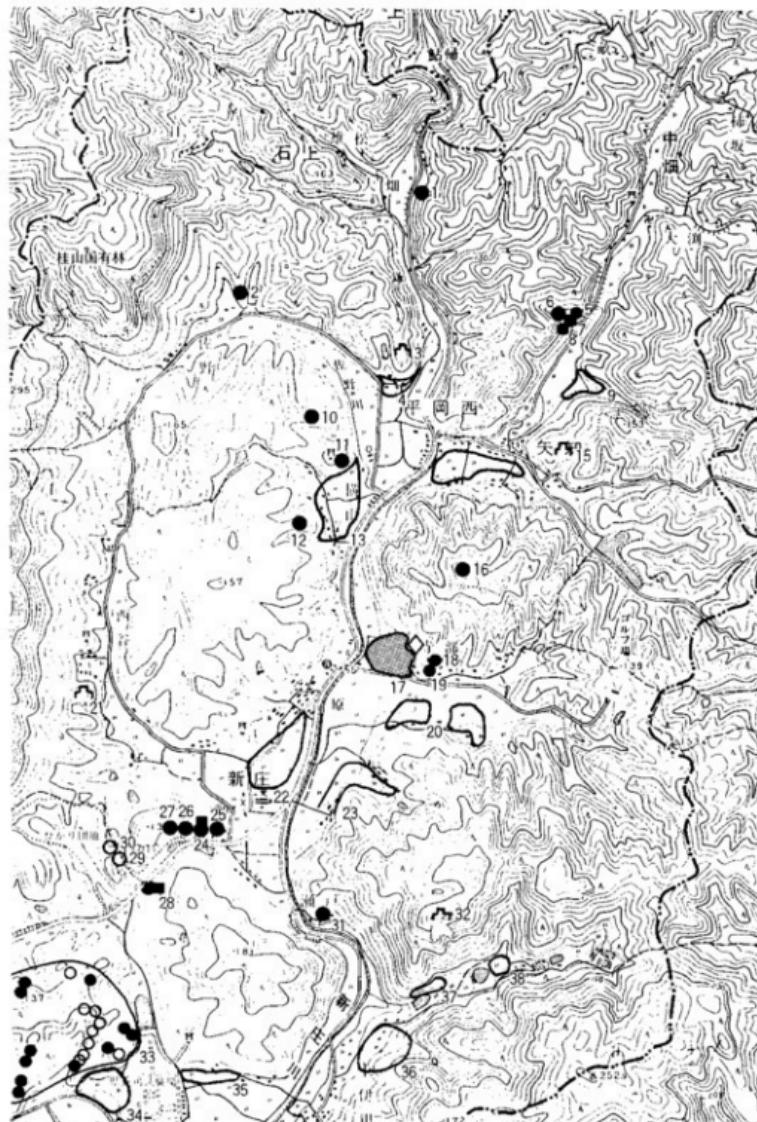


図2 調査地周辺遺跡分布図 (1:25,000)

## II 調査に至る経緯と経過

### 1. 調査に至る経緯

本調査は昭和60年度より着手された県営は場整備事業（五城北地区）に伴うものである。昭和60年度に工事に先立ち、同地区ではすでに、周知の新庄尾上遺跡と宅美池遺跡ほかの確認調査が行なわれ、その結果、新庄尾上遺跡については、排水路部分並びに削平される部分のみ調査することになったが、その他の地域については工事に着手する前に立会調査をすることにした。寺部地区は昭和62年度に着手されたが、立会時に土器片等の出土を見たため、昭和63年2月1日付で遺跡発見届を通知するとともに一時工事を中断した。御津町教育委員会では、現地の状況から見て極力遺跡の保存につとめ、止むおえず削平される部分について調査をすることにしたが、調査員未定のため繰り延になっていた。昭和63年8月1日付で御津町教育委員会に発掘調査員の採用を見、同日から発掘調査が開始された。

発掘調査は御津町教育委員会が実施した。発掘調査期間は昭和61年8月1日から昭和63年9月21日である。

調査にあたっては岡山県教育委員会の指導・助言を得た。また、御津町役場をはじめ地権者等関係各位からは多大な御協力を得た。さらに、発掘作業に従事していただいた地元の有志の方々にも協力を得た。記して厚く御礼申し上げます。

## 2. 調査日誌

- 8月1日 調査地へ機材搬入 テント設置  
2日 挖削開始 第1遺構面の検出  
3日～18日 第1遺構面の検出と遺構検出を並行して行なう  
12日～15日 盆休み  
18日～19日 第1遺構面の遺構掘削  
19日～22日 第1遺構面の精査  
22日 第1遺構面の写真撮影  
23日 第1遺構面の平板実測  
8月24日～9月7日 第2遺構面の検出と遺構検出を並行して行なう  
8日～9日 第2遺構面の遺構掘削  
9日～10日 第2遺構面の精査  
10日 第2遺構面の写真撮影  
12日 第2遺構面の平板実測  
12日～16日 第3遺構面の検出  
16日～19日 第3遺構面の遺構掘削  
19日 第3遺構面の写真撮影  
19日～20日 第3遺構面の平板実測  
21日 東壁土層断面実測 機材撤収

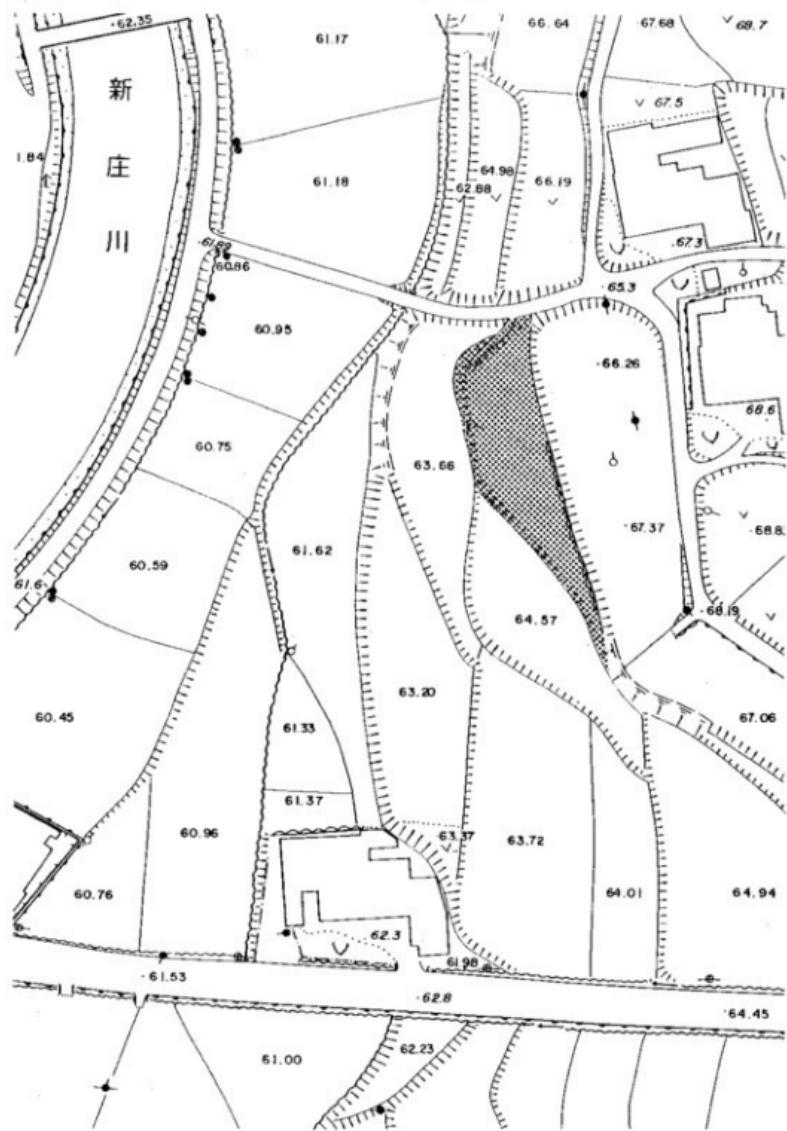


図3 調査位置図 (1:1,000)

### III 調査成 果

#### 1. 基本層序

調査地は、本来は北から南へ、東から西へ緩やかに傾斜していたものを、自然堆積、盛土によって、平坦面を形成していった様相がうかがえる。従って、包含層も北東にいくに連れて厚くなっていた。

層序は上層から、耕作土層、黄赤色砂質土層、灰色砂質土層、褐灰色砂質土と黄褐色砂質土の五層、灰褐色砂質土層、暗茶褐色砂質土層、暗灰色砂質土層、暗茶色砂質土層であった。

黄赤色砂質土層は調査地の全面に存在していた。水田耕土下に一般に見られる鉄分が凝集した層である。層厚は5cm程度であった。耕作面に近いため耕作の影響を受け、遺物は少なく、また、小片ばかりであった。

灰色砂質土層は、かっての耕作土が還元されたものであろう。

褐灰色砂質土と黄褐色砂質土の互層は、ほぼ等間隔でこの二つの土が重なり合っていた。耕作土とその下の鉄分が凝集した土の変化したものであろう。多い所では、8回の重なりが観察できた。現耕作土を含めると、最低10回の重なりがあったわけである。盛土を施しながら、長期間にわたって耕地として利用していたようである。遺物量は少なかった。

灰褐色砂質土層、暗茶褐色砂質土層、暗灰色砂質土層は、上層2層にマンガン粒が含まれていることを除いて、ほぼ同質のものであった。地山面の傾斜のため、下層にいくに連れて、調査地の南側へのみ存在していた。遺物は下層ほど多く出土したが、全体的に量は少なかった。

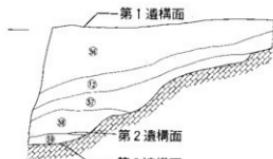
暗茶色砂質土層は調査地の南半にのみ存在していた。層厚は南端の厚い所で10cm程度であった。遺物の出土量は多かった。

地山は、花崗岩ばいらん土から成るしっかりした赤黄色砂質土であったが、調査地の東辺では、軟質化し、黒褐色粘質土が木根状に貫入している状況が見られた。遺物の出土も見られないのであることから、木根の腐植によって形成されたものであろう。

#### 2. 第1遺構面

第1遺構面は、耕作土層、黄赤色砂質土層、灰色砂質土層を除いた面で検出した。検出面のレベルはT.P.+約65mでほぼ平坦であるが、黄赤色砂質土層と灰色砂質土層は層厚が薄いため同時に掘削した。従って、この2層の遺物は、『黄赤色砂質土層出土』として取り上げている。

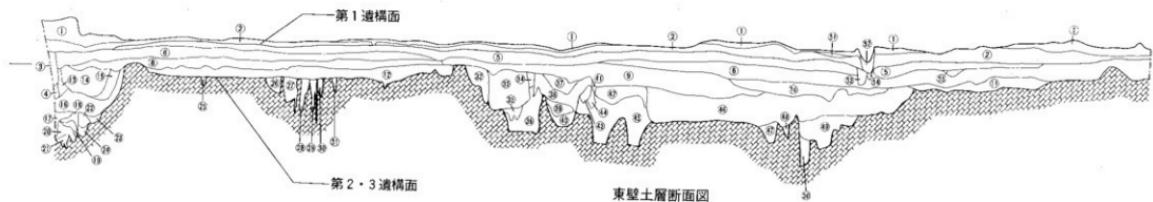
黄赤色砂質土層からは、弥生土器、土師器、須恵器、備前焼搖鉢、磁器等が出土した。しか



東西断面北壁土層断面図

- ④褐灰色砂質土と黄褐色砂質土の互層
- ⑤暗茶褐色砂質土 (Mn含む)
- ⑥暗褐色砂質土
- ⑦暗茶色砂質土
- ⑧⑩境にMn多量に沈着

- |                   |                                  |                |
|-------------------|----------------------------------|----------------|
| ①耕 土              | ㉑暗褐色粘質土                          | ㉔茶灰色砂質土 (草根痕)  |
| ②黄赤色粘質土           | ㉒淡黃灰色細砂 (木根痕)                    | ㉕褐色砂質土         |
| ③黄灰色砂質土           | ㉓灰色粗砂                            | ㉖明茶色砂質土 (Fe沈着) |
| ④茶灰色砂質土 (上方にMn多)  | ㉔灰茶色砂                            | ㉗暗灰褐色砂質土 (木根痕) |
| ⑤灰色砂質土 (Mn含む)     | ㉕黄灰色砂質土 (草根痕)                    | ㉘暗褐色砂質土 (木根痕)  |
| ⑥褐灰色砂質土 (Mn多)     | ㉖暗灰褐色砂質土                         | ㉙茶灰色砂質土        |
| ⑦明灰褐色砂質土          | ㉗黒灰褐色粘質土と<br>赤黄色砂質土の混り<br>(木根痕?) | ㉚暗褐色砂質土        |
| ⑧黄褐色砂質土 (Mn含む)    | ㉘暗灰褐色砂質土                         | ㉛暗褐色砂質土 (木根痕?) |
| ⑨黄褐色砂質土と赤黄色砂質土の混り | ㉙暗褐色砂質土                          | ㉜暗褐色砂質土        |
| ⑩黑褐色砂質土 (Mn含む)    | ㉚暗褐色粘質土                          | ㉝黄褐色砂質土        |
| ⑪胡茶褐色砂質土 (Mn含む)   | ㉛暗茶褐色砂質土                         | ㉞灰色粘質土         |
| ⑫灰褐色砂質土 (Mn含む)    | ㉜胡茶褐色砂質土                         | ㉟茶褐色砂質土        |
| ⑬明茶色砂質土 (Mn含む)    | ㉝暗褐色砂質土                          |                |
| ⑭灰褐色砂質土 (上方にMn多)  | ㉞暗赤褐色砂質土                         |                |
| ⑮明茶色砂質土           | ㉟暗褐色粘質土                          |                |
| ⑯灰茶色砂質土 (Mn含む)    | ㉟暗茶褐色砂質土                         |                |
| ⑰灰褐色砂質土           | ㉟赤茶色砂質土                          |                |
| ⑱灰茶色粗砂            | ㉟暗灰色砂質土                          |                |
| ⑲淡灰黄色細砂 (木根痕)     | ㉟暗青灰色砂質土                         |                |
| ⑳赤茶色粗砂            | ㉟暗青灰色砂質土                         |                |



東壁土層断面図

L = T,P.+65.00m

↑ 1/40  
← 1/200

図4 調査地土層断面実測図

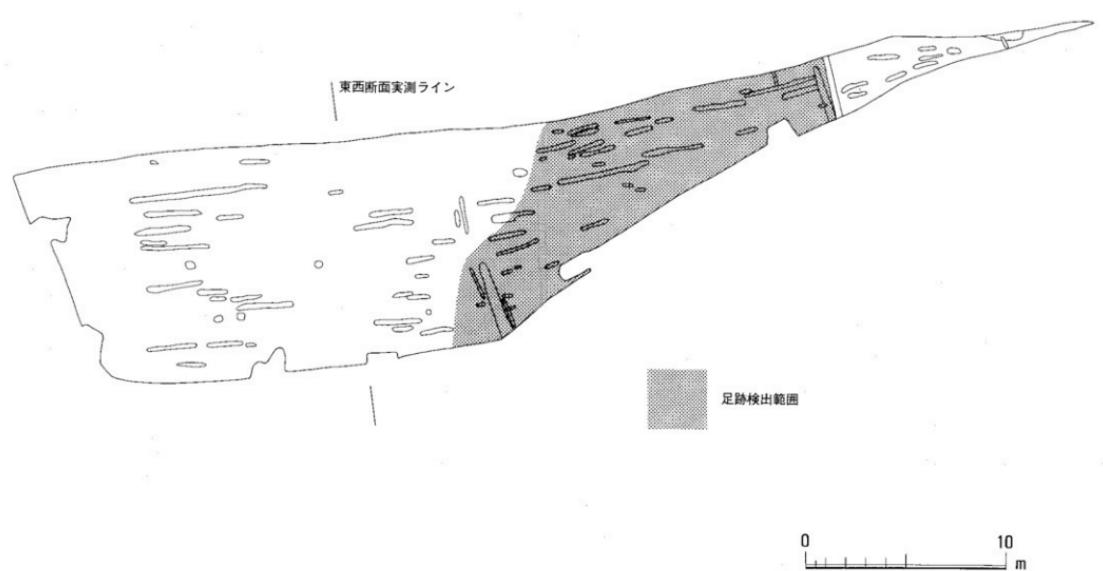


図5 第1構造面平面図

し、遺物の出土量は少なく、細片のため、図示することはできない。

第1遺構面では黄灰色砂質土を埋土とする多数の溝を全面で検出した。長さは0.4~7mと多様だが、幅20~30cm、深さ5~10cm程度である。方位はN-約5°-Wである。溝の埋土からは、弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器等が出土したが、いずれも細片のため、図示することはできない。調査区のほぼ中央と南寄りの2ヶ所で、それらに直交する溝を検出した。溝の様相は南北方向のものと同様であった。これらの溝によって、調査地内は南北方向約20mの区画に区切ることができる。埋土からは土師器、須恵器の小片が出土した。

この他に調査地中央の東西方向の溝で区画される部分において、黄灰色粗砂を埋土とする多数の偶蹄類の足跡を検出した。方向は溝と同様の南北方向のものも見られたが、ほとんどは重なり合い、一定していない。踏み込みの深さは、検出面から3~5cm程度である。遺物は認められなかった。これらの遺構は耕作に伴って形成されたものであろう。

第1遺構面の時期は近世以降に位置付けられよう。この時期、調査地は耕作地として利用されていたのであろう。

### 3. 第2遺構面

褐灰色砂質土と黄褐色砂質土の互層からは、出土量は少ないが、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、備前焼、磁器、スラッグ等が出土した。

1~3は弥生土器である。胎土には石英、長石の砂粒を含む。1は高杯杯部である。内外面

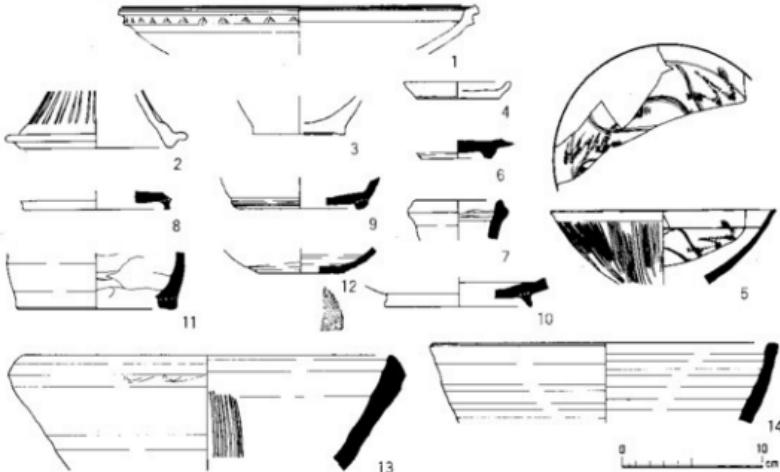


図6 褐灰色砂質土・黄褐色砂質土層出土遺物実測図

ともなで調整を施した後、口縁端面に2条、口縁部内面に3条の凹線文を巡らし、外面の口縁部下には鉛描きの鋸齒文を施す。2は高杯脚部である。脚端部は横なで調整、脚部外面は箇磨き調整を施す。透し孔は貫通していない。3はやや上げ底の底部である。磨滅が著しく、表面調整は不明である。4は土師器小皿である。底部は内外面とも指頭圧痕が残存している。口縁部は横なで調整で仕上げられている。淡赤黄色を呈する。5は同安窯系青磁碗である。体部は内窓気味に立ち上り、口縁部はやや外反する。内面には花文を施し、口縁近くに1条の沈線を入れる。外面には櫛目文を施す。6は唐津焼である。高台は削り出している。内面には淡灰緑色の釉が施され、焼き台痕が3ヶ所見られる。外面は淡赤茶色、断面は灰色を呈する。7～12は須恵器である。7は口縁部で、端面には黒灰色の自然釉が付着している。8～10は貼付け高台の底部である。12は底面に糸切り痕が見られる。断面は淡紫灰色を呈している。13は備前焼擂鉢である。口縁部はやや肥大している。口縁部外面には指頭圧痕が残存している。内面は使用による磨滅が著しい。外面は灰色、内面は暗赤茶色、断面は淡赤紫色を呈する。14は須恵質鉢である。口縁端面はほぼ水平である。口縁部はわずかに外反している。

これらの遺物より、調査地は、中世から近世にかけて、長期間にわたって耕作地として利用されていたのであろう。

灰褐色砂質土層からは、弥生土器、土師器、須恵器、青磁、備前焼、早島式土器等が出土した。

15～22は須恵器である。15～20は貼付け高台の底部である。21は底部である。内面には成形

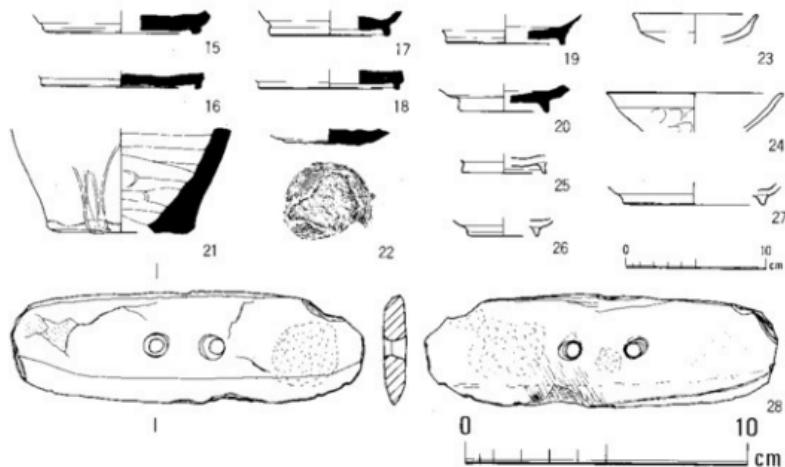


図7 灰褐色砂質土層出土遺物実測図

時のナデ痕を残す。表面は暗茶色、断面は灰色を呈する。外面には暗緑色の自然釉が厚く付着し、一部は底面にまで滴下している。内面にも同様の自然釉が所々に薄く付着している。22は底面に糸切り痕が見られる。また、須恵器片が焼着している。23は土師器小皿である。口縁部は外反している。胎上は砂粒も少なく、淡肌色を呈する。24~26はいわゆる早島式土器である。土師質で、主に淡黄色~淡肌色を呈している。24は口縁部が緩く外反している。体部外面には指頭圧痕が残存している。25・26は貼付け高台の底部である。27は24~26と同様の胎土の貼付け高台の底部である。復元に疑問はあるが、皿の可能性もある。28は磨製石包丁である。周辺が一部欠損しているが、ほぼ完形である。穿孔は両面穿孔で、ズレがある。また、孔の上辺には使用時の研ぎ跡が見られる。一部に原石の風化面を残すが、黒灰色を呈している。黒色粘板岩製である。

暗茶褐色砂質土層からは、弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、青磁、白磁、備前焼等が出土した。

29~32は弥生土器である。29は高杯杯部である。口縁端部は下方にやや拡張し、端面には凹線が1条施されている。胎上は長石粒を少量含んでいる。30は鉢あるいは高杯杯部である。体部は内窓気味に立ち上がる。胎上には径1~2mmの細縫が多く含む。磨滅が著しいため、調整の詳細は不明だが、口縁部には横なで調整が施されている。体部内面には指頭圧痕が残存している。31・32は底部である。31の底面は突出しているため安定性は悪い。33~36は土師器である。33・34は小皿である。共に底部内面はなで調整、口縁部は横なで調整が施されている。底面には仕上げ調整は施されず、成形時の痕跡が見られる。口縁部は外反し、端部は丸くおさめられている。胎土は砂粒も少なく、淡黄橙色を呈している。35は小皿底部である。底部中央には、成形時に粘土を回転させながら指で引き延した痕跡が残存している。36は貼付け高台の底部で

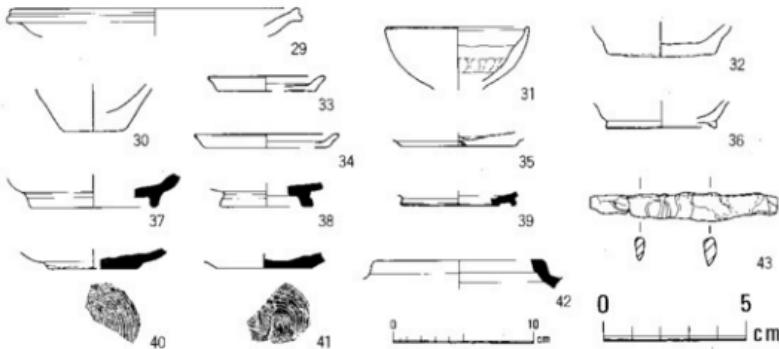


図8 暗茶褐色砂質土層出土遺物実測図

ある。高台は断面三角形で外方へ張り出している。胎土はよく精製されている。淡橙色を呈する。37~42は須恵器である。37~39は貼付け高台の底部である。37の高台は内側へ入り込んでいる。40・41は底部である。糸切り痕が残存している。42は円面鏡の陸部である。陸上部はわずかに膨らんでいる。陸上面は使用による磨滅のため、なめらかである。43は刀子状の鉄製品である。全体に鋒化が著しい。断面は三角形を呈している。現状で6 gを計る。

暗灰色砂質土層からは、弥生土器、土師器、須恵器、備前焼、早島式土器等が出土した。

44は弥生土器である。高杯脚部である。磨滅が著しく、調整等の観察は不可能である。45・46は土師器である。45は小皿底部である。口縁部は外反する。底面には仕上げ調整が施されず、成形時の回転痕を残すが、他は横なで調整で仕上げられている。46は脚部である。薄く、外反している。脚部内面には体部への接合痕が明瞭に残存している。47~49は須恵器の貼付け高台の底部である。50・51は釘状の鉄製品である。50は一方の端部は欠損しているが、残存している方の端部はさじ状に加工され、頭を形成している。断面はほぼ正方形を呈している。現状で5 gを計る。51は鋒が固く付着し、本来の形状はほとんどかがえないが、中央部が太く、両

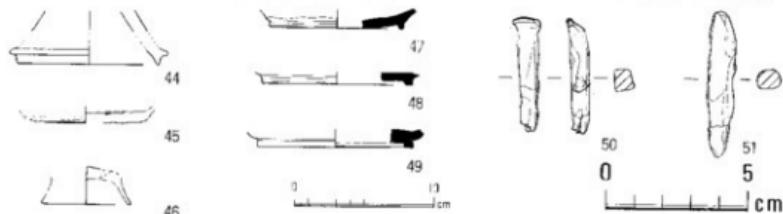


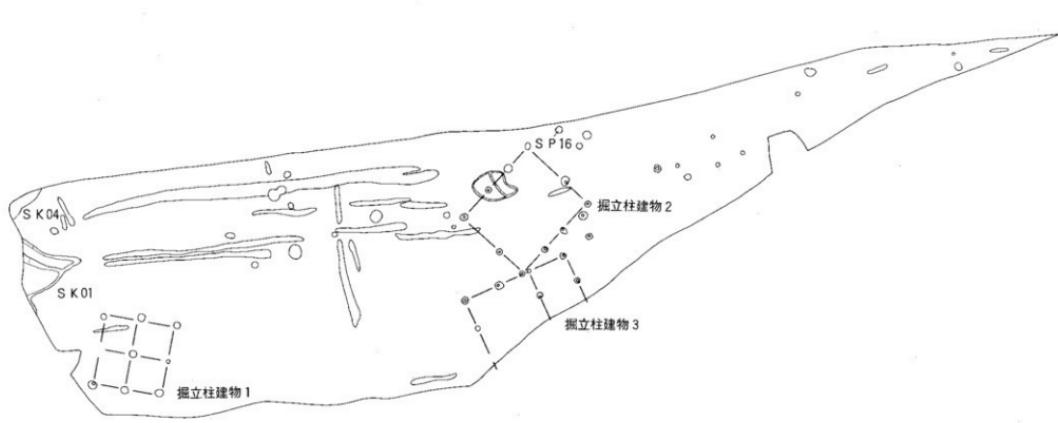
図9 暗灰色砂質土層出土遺物実測図

端へ細くなるようである。一端の頂部に小さな平坦面をもつことから、こちらが頭になるのであろう。断面はほぼ正方形である。現状で9 gを計る。

これらの層を除いた面で、第2遺構面を検出した。検出面のレベルは、T.P.+63.80~64.80 mで、東から西へ、南から北へ緩やかに傾斜している。

検出した遺構は、溝、土壤、ピットの他、掘立柱建物3棟である。

溝は調査地の北半に多く見られた。最大のもので長さ18m、幅0.7mを測るが、大半は長さ2 m前後、幅30cm前後、深さ5~10cmである。ほぼ並行し、方位はN-約5°-Wである。埋土は褐色系砂質土である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器の小片が出土した。調査地の北辺から約15.5mでこれらの溝に直交する溝を3条検出した。長さ1.6~4.5m、幅0.2~0.4m、深さ10cm前後である。埋土は淡灰黄色砂質土である。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器、青磁の小片が出土した。第1遺構面で検出された溝と同様の、耕作に伴って形成されたものであろう。



0 10 m

図10 第2遺構面平面図

土壤は不定形で、埋土も茶褐色砂質土を基本とし様々である。

S K01は調査地の北辺で検出した。東西3.0m、南北2.9m、深さ0.5mである。検出した範囲では平面三角形を呈する。底面は東から西へ2段に落ち込む。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。52は早島式土器の底部である。高台はほぼ直立する。胎土は長石、石英の細礫を少量含み、淡灰黄色を呈する。53は須恵器底部である。内面の立ち上がり部に横ナデ調整を施す他は成形時の痕跡をそのまま残している。

S K04は調査地の北西角、S K01の北側で検出した。検出した範囲では東西0.7m、南北1.6m、深さ0.35mである。埋土からは弥生土器、土師器、須恵器の他、54・55の金属製品が出土した。54は厚さ1mmの薄い板状の鉄製品である。全体に鋳造が著しく、表面は黒色を呈している。両端部は内弯している。一端へ向って漸々に幅が広がっている。毛抜きであろう。55は周囲に断面三角形の突帯を巡らすものの角にあたると考えられる。表面には鉄錆が付着しているが、一部に錆青が見られる。突帯の他に内外面とも文様は見られない。全体に緩やかに湾曲している。重量は34gを計る。青銅製方鏡の破片であろうか。

掘立柱建物は、調査地の北西部でS B01を、調査地の中央部でS B02と03を切り合って検出した。

S B01は2間×2間の総柱の掘立柱建物である。北面中央の柱穴は検出されなかった。また、東面中央の柱穴も軸線からずれるため、この建物に伴わない可能性もある。方位はN-8°-Eである。柱間は1.65~1.8mである。柱穴の掘方の平面はすべて円形で、直径25~30cmである。埋土は赤褐色砂質土が主体である。柱根は遺存していなかったが、南西角の柱穴からは花崗岩の礎石が検出された。柱穴からは土師器、須恵器が少量出土した。いずれも小片で時期の決定には至らない。

S B02は2間×3間の掘立柱建物である。西角はS B03と切り合っていた。方位はN-45°-Wである。柱間は妻面で1.5~2.6m、桁面で1.35~1.8mである。柱穴の掘方の平面は円形で、直径20~35cmである。埋土は赤褐色砂質土が主である。柱根、礎石は遺存していなかった。南西面南側の柱穴の柱痕から弥生土器、土師器の小片と共に、56の鉄製品が出土した。全体に鋳化が著しいが、厚さ5mmの鉄板である。一端を両側から丸く曲げ筒状にし、他の一端は欠損しているが、刃部を成すのか、先端に向って漸々に薄くしている。現状で15gを計る。刃

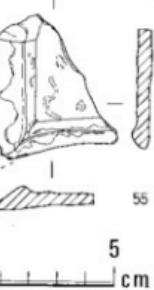
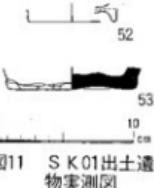


図12 S K04出土遺物実測図

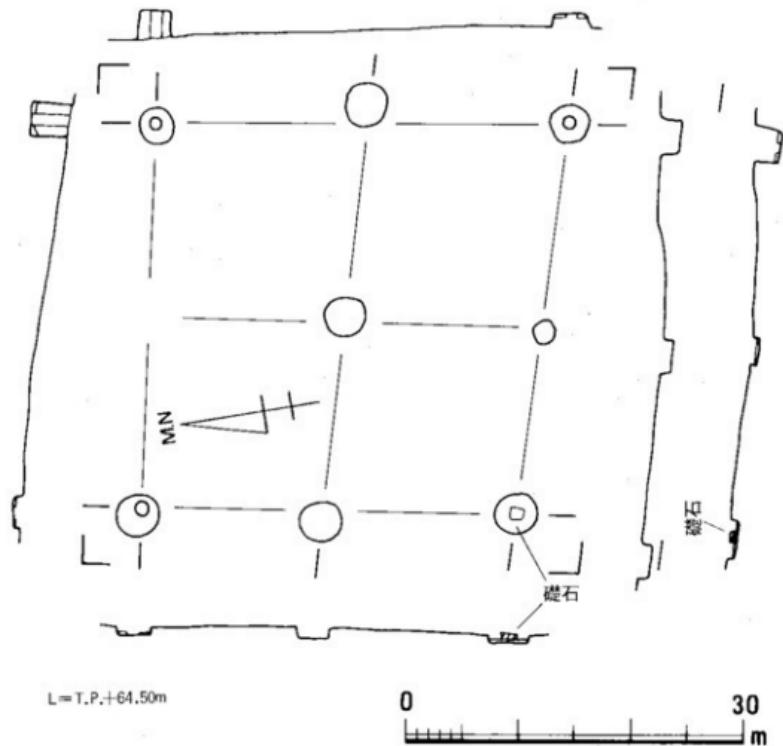


図13 SB01平面図・断面図

部ではあろうが、詳しい用途は不明である。他の柱穴からも弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、小片のため時期の決定はできない。

SB03は南面に1間の庇をもつ、2間以上×2間の掘立柱建物である。西側は調査地外へ延びている。東面中央でSB02と切り合っていた。方位はN-24°-Wである。柱間は1.45~1.8mである。柱穴の掘方の平面は円形で、直径20~30cmである。埋土は赤褐色砂質土が主である。柱根等は遺存していなかった。柱穴の埋土からは弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、他の建物と同様で、時期の決定には至らない。

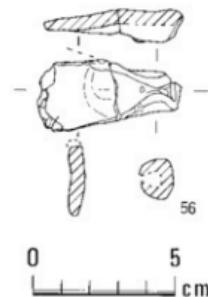


図14 SB02出土遺物実測図

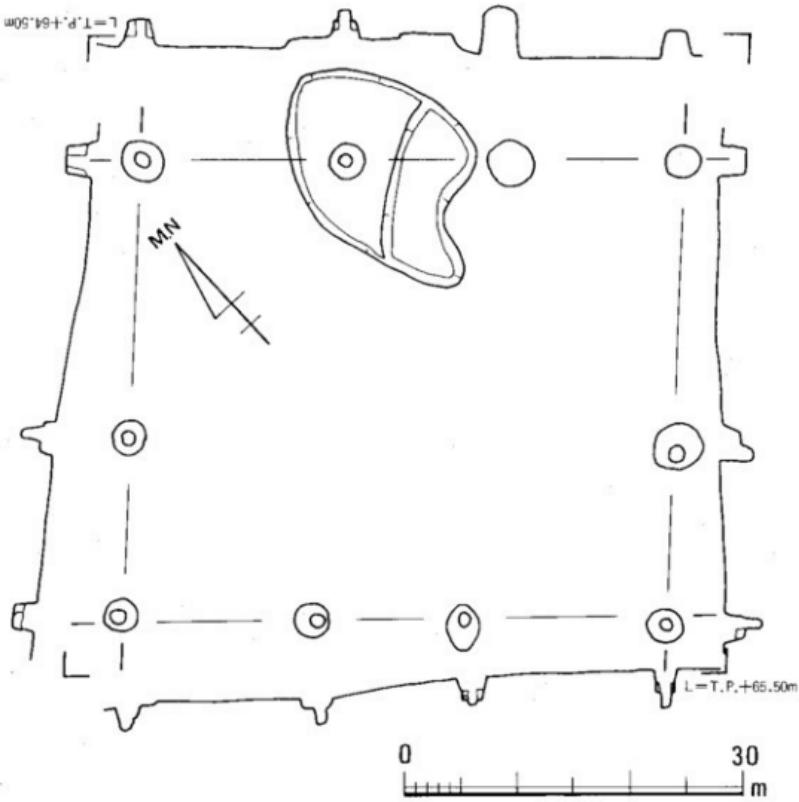


図15 SB02平面図・断面図

SB02・03より南側でピット群を検出した。現状で、直径20~40cm、深さ7~41cmで、柱根等は遺存していなかったが、柱痕の認められるものはあった。57はSP16から弥生土器の小片と共に出土した脚部である。脚はつまみ出している。粗いなで調整が施されている程度で、表面には成形時の押圧痕が残存している。胎土には砂粒が多く含まれている。2次焼成のためか、表面は暗灰色を呈している。製塩土器であろう。他の柱穴の埋土からも、弥生土器、土師器、須恵器が出土したが、掘立柱建物の柱穴と同様で、時期は不明である。また、建物、柵等としてのまとまりも握めず、これらのピットの性格は不明である。

第2遺構面で検出された遺構の時期は限定できないが、この面を覆っていた暗灰色砂質土層

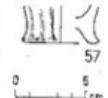


図16 SP16出土  
遺物実測図

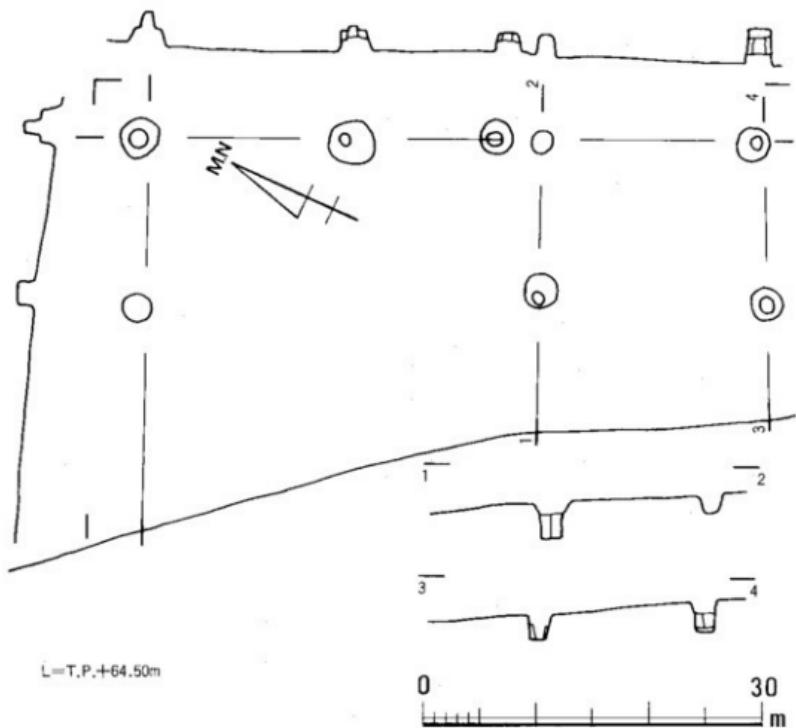


図17 SB 03平面図・断面図

より出土した遺物から、鎌倉時代後半から室町時代前半に位置付けられよう。

この時期、調査地は、北半が生産域、南半が居住域として利用されていたのであろう。

#### 4. 第3 遺構面

暗茶色沙質土層からは、弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦、スラッグ等が出土した。58～62は弥生土器である。58は高杯脚部である。調整の詳細は不明だが、内面に指頭圧痕が残存している。透し孔は貫通していない。胎土は砂粒も少なく良好である。59・60は差し込み技法の高杯脚部である。内面には絞り痕が残存している。胎土は径1～5mmの石英、長石の細礫を多く含む。59は淡赤橙色、60は黄灰色を呈している。61は底部である。磨滅が著しく、詳細は不明である。淡灰赤色を呈する。62は底部である。外面の一部に粗い刷毛目調整が見られる。内面には指頭圧痕が残存している。胎土は花崗岩起源の細礫を含む。淡肌色を呈するが

黒斑をもつ。63～67は土師器である。63は底部である。内面は回転模なで調整、外面は粗いなで調整で仕上げられている。底面には回転糸切り痕が遺存している。胎土には径2mmの石英粒を含む。焼成不良の須恵器であろうか。64・65は小皿である。64は厚手で口縁部は斜めにほぼ真直ぐに立ち上がる。胎土は淡黄色を呈し、良好であるが、磨滅が著しく調整は不明である。65の口縁部は外反しながら立ち上がる。胎土は橙色を呈し、径0.5～1mmの砂粒を含む。底面に成形時の痕跡を残す他は横なで調整で仕上げられている。66は貼付け高台の底部である。高台は断面三角形である。胎土は径0.5mmの砂粒を含み、淡肌色を呈する。67は三足土器の足部

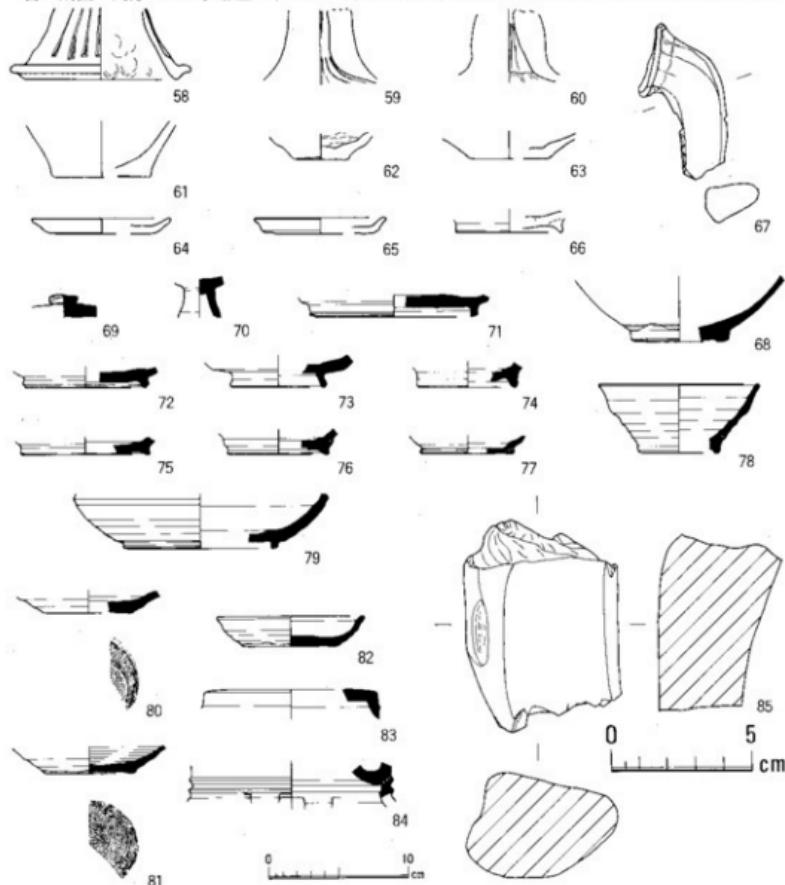


図18 暗茶色砂質土層出土遺物実測図

である。足の断面は三角形である。なで調整で仕上げられ、指頭圧痕が所々に遺存している。胎土には径5mmの砂粒を多く含む。体部内面は淡肌色を呈しているが、外面は火を受けているため暗赤灰色～赤灰色に変色している。68は白磁碗である。体部は内窯しながら立ち上がる。高台内側の削り出しが浅いため、底部は厚く、高台はどっしりしている。内外面とも文様は見られない。外面の高台近くに1条の沈線が巡り、その付近まで施釉している。胎土には黒色の微粒が含まれているが、白灰色を呈している。釉はやや黄色味を帯びている。69～84は須恵器である。69は杯蓋である。碁石状のつまみをもつ。外面は窯変のため、肌荒れが著しい。70は高杯脚部である。外面には淡灰緑色の自然釉が点々と付着している。71～77は貼付け高台の底部である。71・72の高台は断面四角形である。71の底部から胴部の立ち上がりは、稜を成して急に立ち上がる。73・74の高台は高く、外方にふん張っている。75・76の高台は外方に張っているが、かなり低い。76は貼付けた粘土紐が太いため、高台付近は厚くなっている。77は底部の周間に断面三角形の粘土紐を貼付けている。高台は極めて低い。高台というよりは、上げ底状を成している。胎土は黒灰色を呈している。78は高台付碗である。高台は貼付け高台である。体部は内窯しながら立ち上がり、口縁はやや外反する。内外面とも回転ヨコナデ調整で仕上げられている。外面はヨコナデ調整の痕の凹凸が著しい。胎土には径1～5mmの細謫を含み、白灰色を呈する。焼成はやや軟質である。79は胴部下半である。胴部は内窯しながら立ち上がる。内面は回転ヨコナデ調整の後、丁寧なナデ調整を施されている。外面は回転ヘラ削り調整である。遺存部の上端が内傾している。沈線の下半部の可能性もある。80・81は底部である。底面には回転糸切り痕が遺存している。他の部分は回転ヨコナデ調整で仕上げられている。80の胎土は白灰色を呈し、焼成は軟質である。81の断面は赤紫色を呈している。82は杯である。体部は内窯気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内外面とも回転ヨコナデ調整が施されている。底面は回転ヘラ切りで切り離されたままである。83・84は円面鏡である。83は陸部である。陸部はやや膨らんでいる。上面には使用による磨滅が見られる。84は海部から脚部上半である。脚部は外へ開くようである。外周には2条の突線が巡る。脚部には長方形の透し孔が開けられていたと考えられる。鏡面、脚、堤と別々に接合している。83・84とも丁寧なヨコナデ調整で仕上げられている。胎土は径0.5mmの白色粒を含む。表面は灰色～青灰色を呈しているが、断面は淡茶灰色を呈している。84の上面には暗緑色の自然釉がゴマ状に付着している。寒風窯の製品であろう。85は磁石である。使用面は一面で、船底状に凹んでいる。砂岩製である。

暗茶色砂質土層を除いた面、すなわち、地山面で第3遺構面を検出した。第1節で述べたように、地山面は南から北へ、東から西へ緩やかに傾斜している。検出面のレベルは、T.P.+63.80～64.50mである。

第3遺構面では少数の土壤を検出した。



図19 第3構造面平面図

土壤の各々の形状は様々である。また、まとまりも握めない。埋土は暗茶色系の砂質土を基本とする。埋土から弥生土器、土師器、須恵器の小片がわずかに出土したものがある。

調査区の北西部において、暗茶色砂質土を埋土とする偶蹄類の足跡と思われるものを検出した。一部に方向性の認められるものもあったが、大半は方向性もなく、形も不明瞭であった。足跡に混って倒壊したアシのような水際植物の腐植したものも検出した。

第3遺構面で検出した遺構の中には、弥生・古墳時代に位置付けられるものもあるが、現時点においては、この面の一部を覆っていた暗茶色砂質土層より出土した遺物から、13世紀後半を下らない時期に位置付けたい。

この時期、調査地は湿地で、水際植物が繁殖していたようである。積極的に利用されていたような状況はうかがえない。

\* 伊藤 見氏のご教示による。

## IV ま　と　め

今回の調査は、寺部遺跡の極く一部を調査したに過ぎない。しかし、いくつかの注目すべき成果があった。以下、時代に沿って調査地とその周辺の変遷を追ってみたい。

### 弥生・古墳時代

新庄川は蛇行を繰り返し、いわゆる『暴れ川』であったのである。調査地の西側までがその氾濫源であったようである。調査地は水際植物が繁る湿地であったのである。それ由に、人手が加っていた状況はうかがえない。しかし、包含層からは同時期の遺物が出土していることから、調査地の東側の斜面に集落の存在が想定される。

### 古　代

前代と同様、積極的に利用されていた状況は見られない。包含層からはこの時期に位置付けられる遺物が出土している。中でも、円面鏡は注目に値しよう。近隣に識字層の存在が考えられる。そこで、遺跡名でもあり、字名でもある『寺部』が問題になってくる。調査地周辺には、『門所』・『寺奥』といった屋号等が残っていることからも、寺院の存在が考えられる。しかし、寺部における寺院の記録は江戸時代、寛文6年(1666)年に廃絶させられた賢徳寺のみである。しかも、賢徳寺に関する記録は乏しく、所在場所すら不明である。調査地の東側の小さな谷(図2△)をその場所とする向きもある。現地は雑木に覆われてはいるが、不自然な平坦面が見られる。また五輪塔も採取されている。賢徳寺ではないにしても仏教関係の何らかの施設があったのである。円面鏡をこの賢徳寺と結び付けるのは単純すぎるが、賢徳寺、あるいはその前身寺院の創建は奈良時代にまで遡るのかもしれない。

### 中　世

調査地はこの時期、最も成況を呈していたようである。山裾に建物が並び、周辺に水田が広がるといった、現在の寺部地区の景観はこの時代に形作られたのである。調査地も同様で、縦柱建物や庇付建物が検出されている。建物の廃絶後は、数度に渡り傾斜地に土を盛り、平坦面、すなわち可耕地の拡大を計ったようである。また、瓦器、東播系ねり鉢、備前焼、早島式土器、龜山焼が出土していることから、これらの交易圏内に位置付けられる。輸入陶磁器を使用できた階層の存在も考えられる。

### 近世以降

基本的には前代と同じ状況であろう。建物は山側へ下ざり、平坦地はすべて耕作地として利用していたのである。調査地も全面から掘溝が検出されており、耕作地としての利用がうかがえる。ただ、南北方向20mに区画できるのは、人力主体の耕作の限界を示しているのである。

うか。これらは、圃場整備前の状況と全く同じと言っても過言ではなかろう。

#### 現代、そして未来

現在、調査地周辺は圃場整備が完了し、様相は一変している。整然と区画された水田が広がり、かつての様子を想い起すことすら難しい。

夏は緑色に、秋は黄金色に色付く美しいこの光景を将来に伝えていきたいものである。そして、寺部地区の未来を考えるときに、寺部遺跡のはんの一部をかいまたに過ぎないが、この調査成果が何らかの役に立てれば幸いに思う。

#### 注

- ① 宇野尚憲氏のご教示による。
- ② 御津町史編纂委員会『御津町史』(1985)
- ③ 石川富雄『熊野神社とわが村々』(1988)
- ④ 注③と同じ。また、宇野尚憲氏からも、幼少時に五輪塔を探取したとのご教示を頂いた。



写真1 調査地遠景（南から）



写真2 調査地近景（南西から）

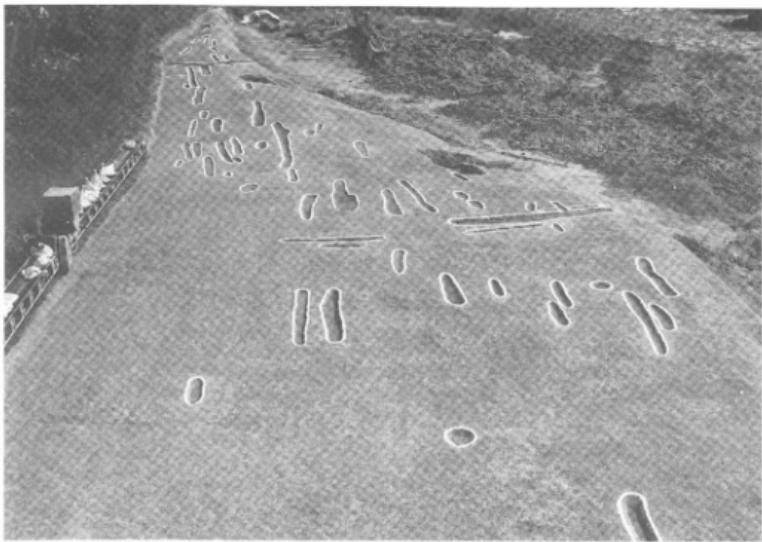


写真3 第1遺構面（北から）



写真4 第1遺構面（南から）



写真5 第1遺構面 足跡（南から）

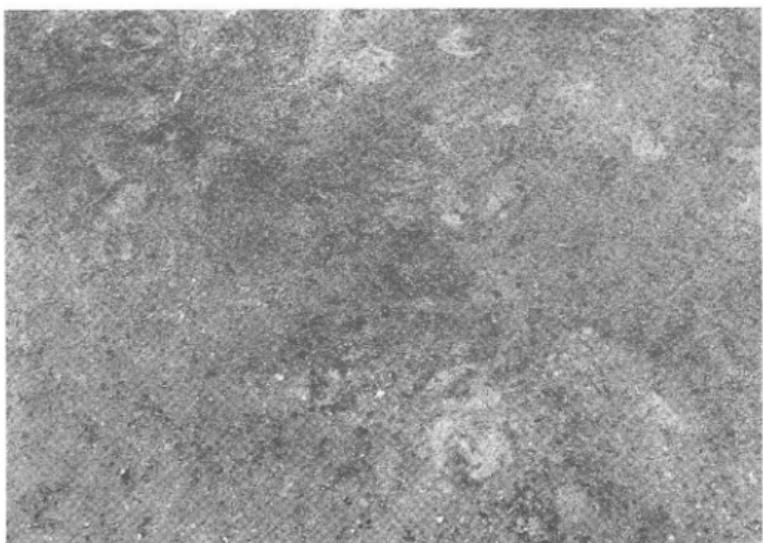


写真6 第1遺構面 足跡（南から）



写真7 第2遺構面（北から）

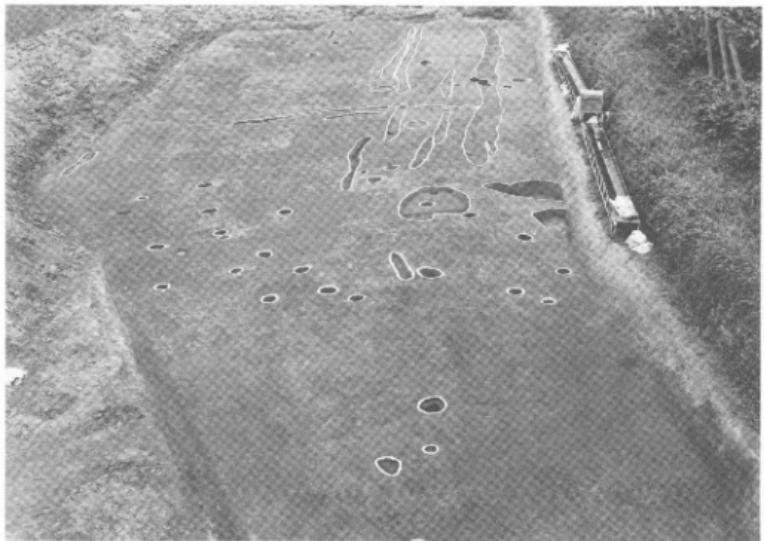


写真8 第2遺構面（南から）

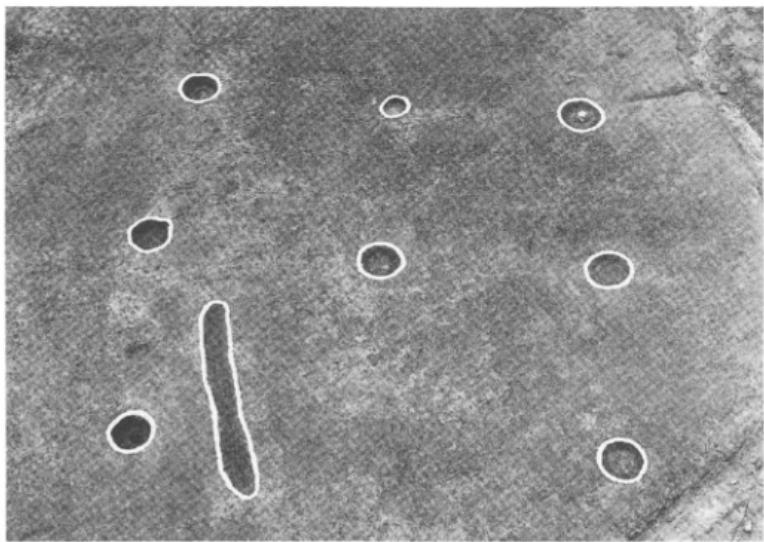


写真9 第2遺構面 SB01 (北から)

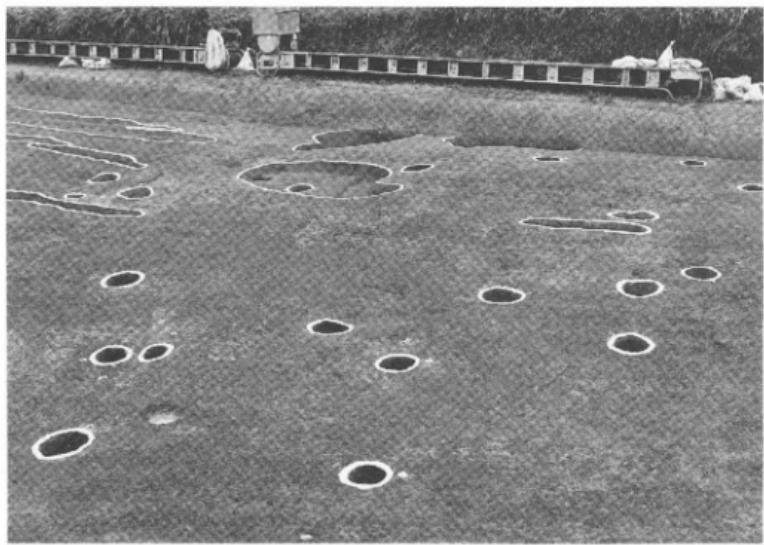


写真10 第2遺構面 SB02 (西から)

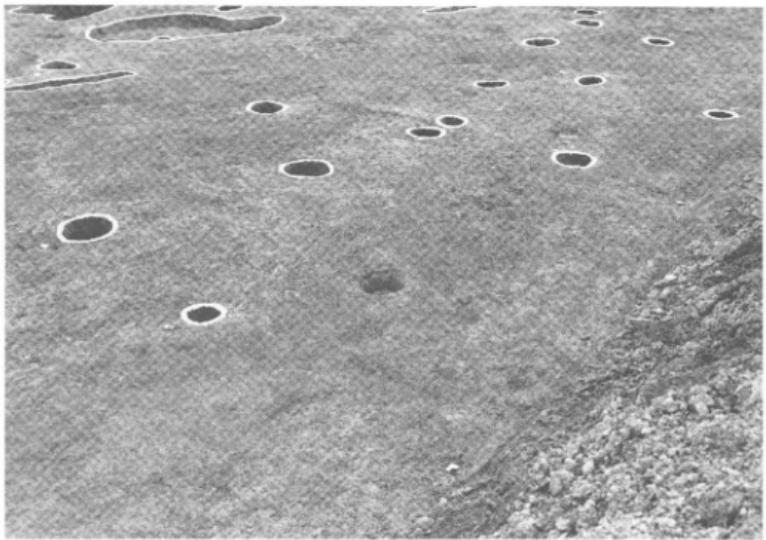


写真11 第2造構面 SB03 (北西から)

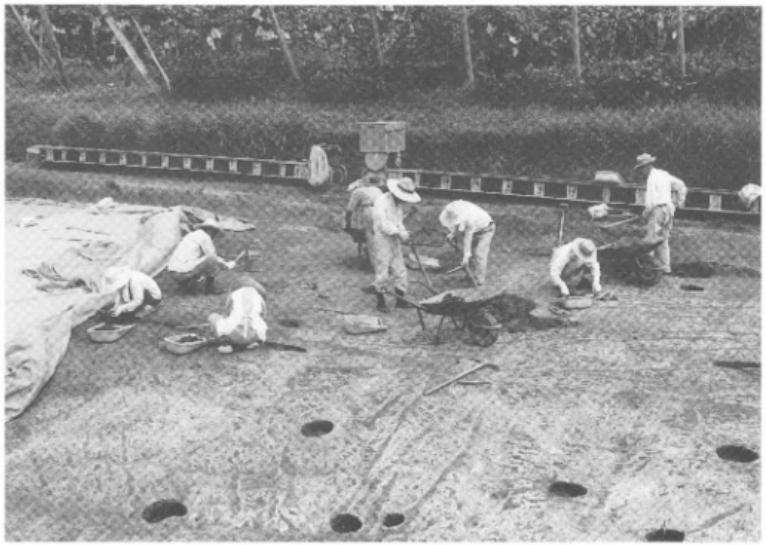


写真12 作業風景



写真13 第3遺構面（北から）

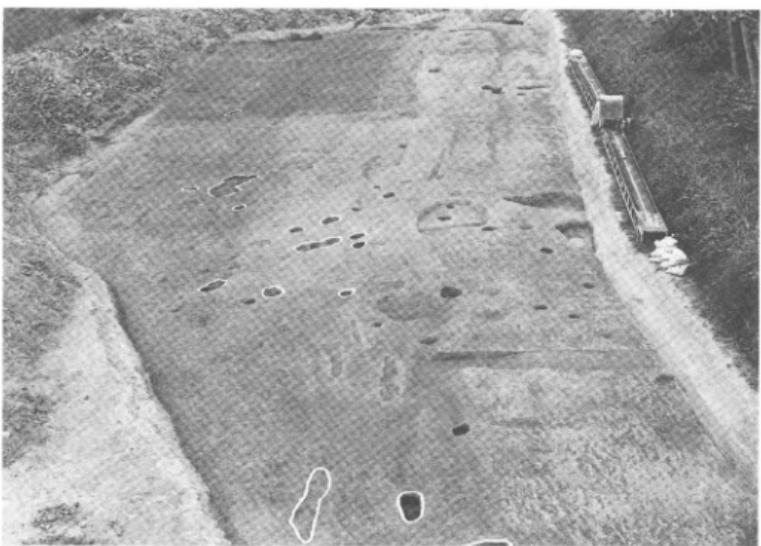


写真14 第3遺構面（南から）

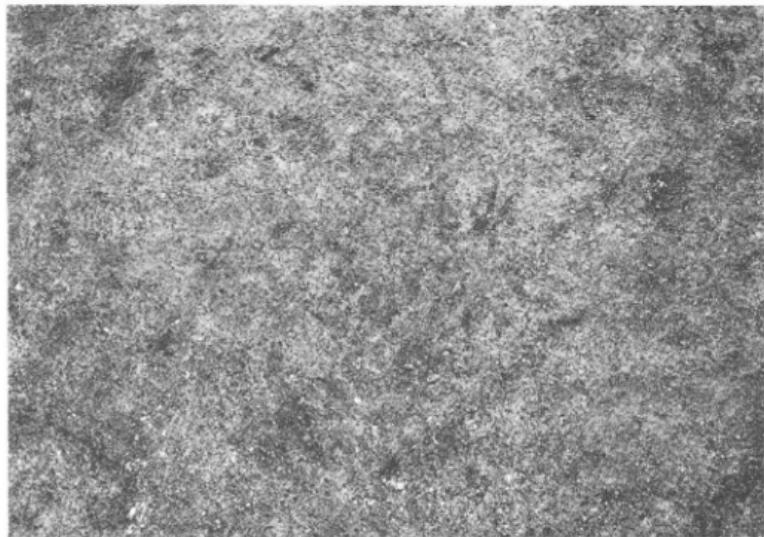


写真15 第3遺構面 足跡？（南から）

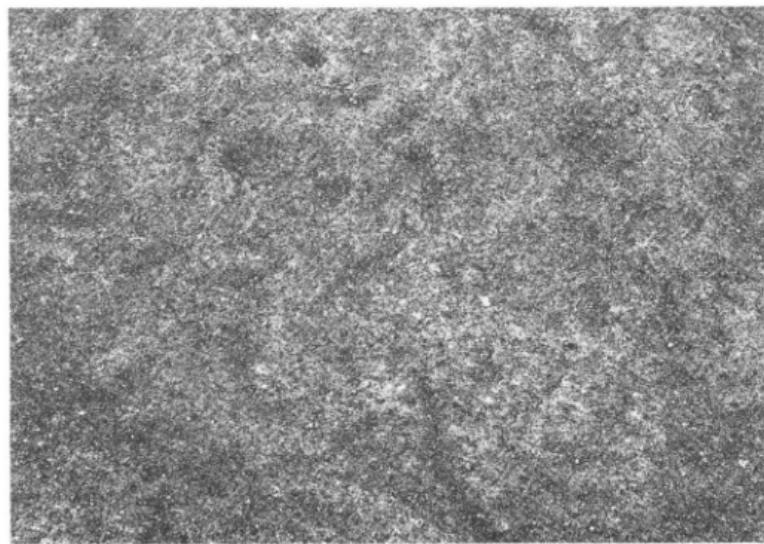


写真16 第3遺構面 足跡？（東から）



46



5



50

51



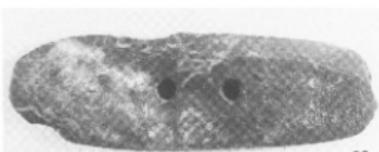
35



43



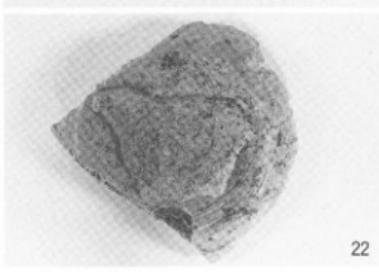
42



28



21



22

写真17 出 土 遺 物 (1/2)

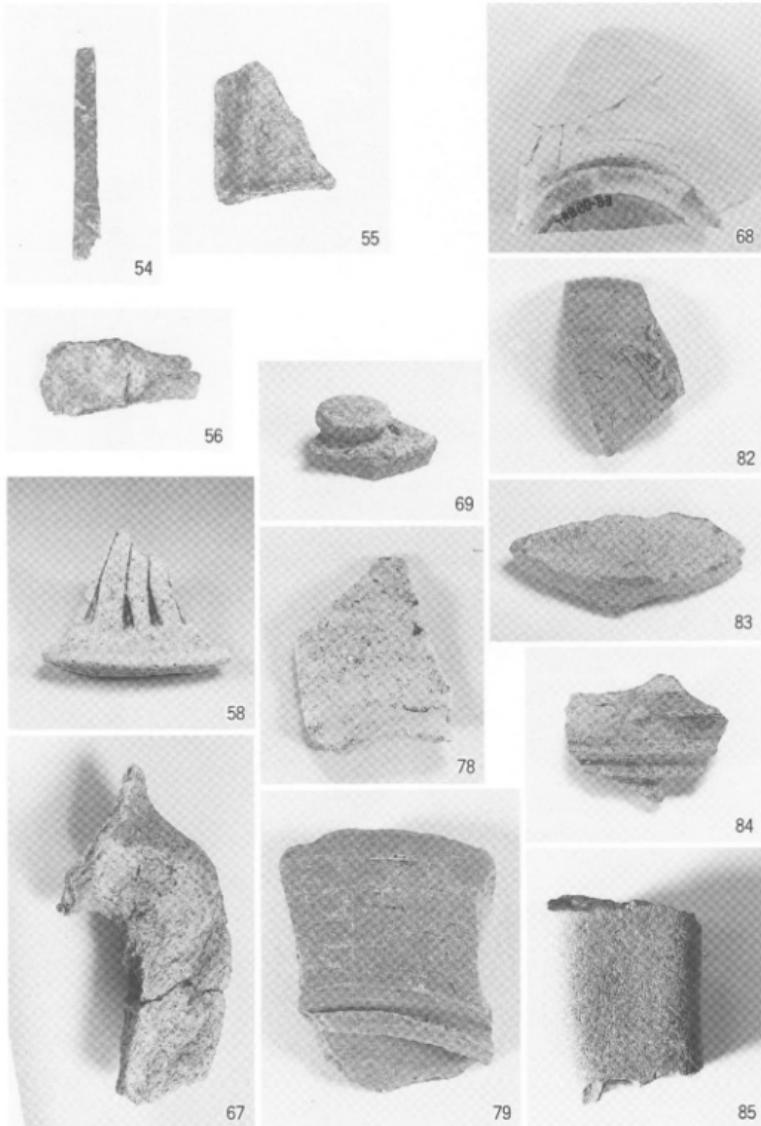


写真18 出土遺物 (1/2)



写真19 調査地現状遠景（南から）



写真20 調査地現状近景（南から）

御津町埋蔵文化財発掘調査報告 6

## 寺 部 遺 跡

1990年2月28日発行

発 行 岡山県御津町教育委員会  
岡山県御津郡御津町大字字垣1629

印 刷 柳本印刷株式会社  
岡山県総社市総社1丁目10番24号